

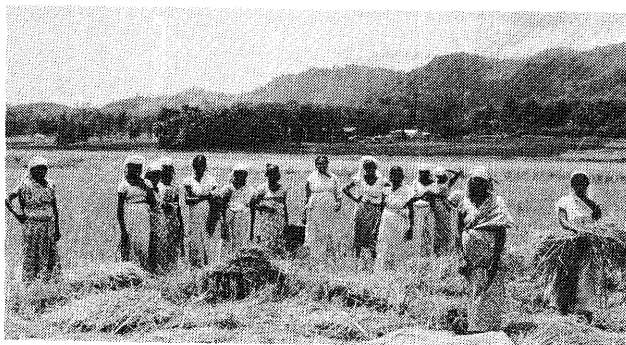
シンハラ人の服装文化

中村尚司

服装文化の
民族的背景

スリランカの服装文化は、熱帯の湿潤な島国という気候風土に由来する、全住民に共通の性格がある。それと同時に、多民族社会であるため、民族ごとに固有の特徴もある。たとえば、島の北端に住むスリランカ・タミル人や中央山地に住むインド・タミル人の普段着は、南インドのタミル・ナードゥ州やケーララ州の衣類とほぼ同じである。単にデザインやスタイルが似ているだけでなく、生地や衣類そのものも南インドからの輸入品が主流を占め、柄や色の流行まで、大きな影響を受けるようである。

イスラム教徒のマラッカラム人は、メッカへ巡礼に行った経験のある人を中心に、西アジアの服装文化の影響を受けている。帽子を着用する男性や、人前では顔を隠そうとする女性の衣類は、宗教生活と直接的に結びついている。また、ランシー人のようにヨーロッパ出自を民族のアイデンティティとする人たちは、欧米の流行を取り入れることに熱心である。



水稻の束を脱穀場(kamata)へ運ぶ女性労働者

このように多様な衣類の文化が併存することを前提にしな
がらも、ここでは主として、多数民族であるシンハラ人の服
装文化を取り上げることとする。同じシンハラ人の日常着で
も、十六世紀以来、ポルトガル、オランダ、イギリスの順に
植民地支配を受けた、沿海地方の住民であるパハタラタ・シ
ンハラ人の服装は、西洋文化の受容が進んでいる。これに対
して、十九世紀までシンハラ王国の支配下にあった、島の中
央部の住民であるウダラタ・シンハラ人の衣生活は、伝統的
な服装を大切にする傾向が見られる。

それでは、「シンハラ人の伝統的な衣生活の特徴は何か」
という問いに答えることはやさしくない。「先住民のウエッ
ダ人の衣生活を受け継いだ」と答える人もいる。初期のウエ
ッダ民族誌の記述や写真を見ると、男性は日本の越中褌そつ
くりの腰布のみである。女性は、下半身のみを覆う腰巻き姿
である。十七世紀にスリランカに漂着し、島の中央部に抑留
されていたイギリス東インド会社の船員、ロバート・ノック
スが残したウダラタ・シンハラ人の日常着のスケッチも、ウ

エッダ人の衣類と変わらない。

イギリス支配からの独立運動が盛んになった一九二〇年代に、シンハラ人の民族主義者は、インド国民会議派のスワデシ運動の影響を受けて、背広の上下にネクタイという西洋風の服装を捨てた。代わりに、白いドーティを腰に巻き、その上に丈の長い白の長袖のシャツを着用した。そして、靴下と革靴を脱いで、革草履にはき代えた。これがシンハラ政治家の典型的な服装となり、現代でも大統領や大臣が議会に出席する時は、このような装いをする。そのため、これがスリランカの民族服である、という人もいる。しかし、このような政治家や官吏のものが、民衆の日常着として、広く普及しているとは言いがたい。

農村地域では、今日でもシンハラ農民が、アムダと呼ばれる越中禪姿で、水牛を使って水田の耕起作業をしている。一九六〇年代に、筆者が農村調査を試みた頃は、レッダと呼ばれる腰巻き姿で、上半身に何も着けない女性も珍しくなかった。アムダやレッダこそシンハラ人の民族衣装だ、という人も少なくない。

衣服の変化と多様性

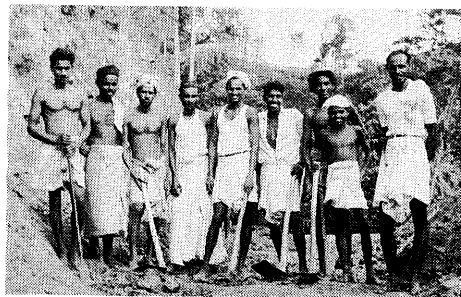
シンハラ人の日常着のなかで、誰の目からも区別でき、またそれが社会の規範を明示的に表しているのは、サフラン色の僧衣である。僧衣を身に着けなければ、あるいは一度身につけ、いかに高い徳を積もうとも僧衣を捨てれば、社会的な尊敬を失う。制度上、尼僧は、仏教教団によって認知されていない。しかし、彼女たちはサフラン色の僧衣に似た服装をすることによって、ダサシル・マーター（戒律を守る女性）として民衆に

尊敬されている。

僧侶以外のシンハラ人男性の間で最も普通に見られる服装は、サラマ（ルンギー）という筒状に縫った柄物の布を腰に巻き、袖なしのランニング・シャツを上半身に着用する姿である。女性はインドと同じサリー姿である。ウダラタ・シンハラ女性の場合、上半身はブラウスだけのセパレート型が普通である（レッダ・ハッタイと呼ばれる）。お腹やおへそを人目にさらしてもかまわないが、足はくるぶしまで隠すことが望ましい。これらの点は、おおむねインドと共通している。

インド文明の周辺に位置していた事情からか、あるいは西欧列強の植民地支配を長く受けた事情からか、服装に関するかぎり、インドに比べて異質なものを受け入れることに熱心である。たとえば、植民地行政の影響が残っていた一九六〇年代には、英語が話せるかどうか、服装のあり方に大きな力をふるっていた。

英語が話せない男は、ズボンをはいてはいけない。英語を話せない女は、タイト・スカートを着用してはいけない。これが、当然の社会規範であった。大学生はすべて英語が話せると見なされていたので、教室や食堂ではズボン以外の服装は許されなかった。逆に、食堂の使用人は、英語が話せないのでズボンを着用できな



農作業の服装

かった。私が留学した一九六〇年代は過渡期であり、英語を話せない大学生もキャンパスに登場し始めた頃である。

ある日のこと、私の下宿を訪ねてきた農村出身のセイロン大学生が、白いズボンをはいていたのに、下宿のおばさんの問いかけに、英語で答えることができなかつた。おばさんは、シンハラ語で口汚く罵って、「この家は英語の話せない人間を表玄関に入れることはできない。ズボンをはいているから英語が話せると思ったのに、話せないのならサラマにはき代えて勝手口に廻ってくれ」と大声で言った。玄関まで友人を迎えに出た私の耳には、ひどく理不尽な話に聞こえたものである。

しかし、時代は急速に変わりつつある。一九九〇年代の今日では、このような奇妙な議論は通用しない。英語が話せなくても、誰に気兼ねすることもなく、ズボンやタイト・スカートをはいている男女に出会う。日本の自動車解体工場地帯にやってくるシンハラ人の出稼ぎ労働者は、ほとんど英語を話さないが、サラマをズボンにはき代えている。インド人女性が、海外に出かけてもサリーを捨てることができずに比べて、農村花嫁として来日したシンハラ女性の多くは、一年もたたないうちに、サリーをスカートに代えてしまった。多様な民族文化の社会で育った者の優位性が発揮されている、といえるかもしれないのである。

(なかむら ひさし／龍谷大学教授)